**神の国を知る喜び**　　ルカ 8:4～8

クリスチャンは地上の旅路を終えると天の御国に入ることが約束されています。また主イエスは「天の御国が近づいた。悔い改めなさい」とすでにこの地上に天の御国、神の国が来ているとも言われました。日常生活の中に神の国が来ていることは不思議なことです。まさに奥義と言えます。そしてそれは将来へとつながっています。主イエスはたとえを用いて神の国を語り伝えられました。

今日のたとえ話について主イエスはこう言われました。「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。『彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがないように』するためです。」ルカ 8:10。この主イエスの言葉は、私たちの常識を完全に覆すものです。私たちは普通、たとえ話というのは、分かりにくい事柄を、身近な物事にたとえることによって分かりやすくするために語られるものだと思います。蒔かれた種がどういう土地に落ちるかによって、芽を出して育ち実を実らせるか、それとも育たずに枯れてしまうかが変わるというのは、誰もが知っている常識です。そういう誰にでも分かることを用いて、大事な真理を人々に分からせ、悟らせるためにたとえ話は語られるのだろうと私たちは思うのです。ところが主イエスはここで、旧約の言葉を引用しつつ、たとえを用いて話すのは「彼らが見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがない」ようになるためだと言っておられるのです。つまり、たとえ話を語っても彼らは理解することができないと主イエスはおっしゃったのです。それではたとえ話の意味がないではないか、と私たちは思います。しかしそうではないのです。主イエスはここで、たとえ話が語られる意味をちゃんと示しておられます。それを示しているのは、「あなたがたには神の国の奥義を知ることが許されていますが、ほかの人たちには、たとえで話します。」という所です。「あなたがた」というのは、弟子たちのことです。「ほかの人たち」というのは、主イエスのもとに集まって来た大勢の群衆たちのことです。実は「ほかの人たちには、たとえで話します」と訳されている所は、直訳すれば「他の人々はたとえの中に」となります。つまり「他の人々はたとえの中に置かれたままになる」あるいは「たとえの中に閉じ込められたままになる」としたら分かりやすいかと思います。そして、そこにいる限り「見ていても見ることがなく、聞いていても悟ることがない」のです。たとえ話を話される時点から弟子たちと群衆との区別があるというのです。そのように言うとあたかも弟子たちが霊的に優れていて、たとえ話から神の国の奥義を悟っているかのように思いますがそれは違います。弟子たちも群衆が帰ってからそっと主イエスに「たとえ話」の意味について聞きに行きました。弟子たちは神の国の奥義どころかたとえ話の意味も分からなかったのです。それでも主イエスは弟子たちを神の国の奥義を知ることが許された者として見ていて下さると言うのです。

このたとえ話の中で種を蒔く人が蒔いている種とは神の言葉です。種が蒔かれる土地とは人のみ言葉に対する心の態度です。そして同じ神のみ言葉を聞いても、それが理解され、よい実を結ぶ場合と、実を結ばないままで終わってしまう場合とがあるというのです。種が蒔かれている間に、「ある種が道端に落ちた。すると、人に踏みつけられ、空の鳥が食べてしまった。」というのです。その意味を主イエスは 12 節でこのように説明しておられます。「道端に落ちたものとは、みことばを聞いても信じて救われないように、後で悪魔が来て、その心からみことばを取り去ってしまう、そのような人たちのことです。」。神様のみ言葉を聞いても、後から悪魔がそれを奪い去ってしまう、つまりみ言葉がその人の心に根付かずに失われてしまうのです。「人に踏みつけられ」という言葉から、それが価値のないものとして無視される、ということも感じられます。神様のみ言葉、教えに意味を見出すことができず、それを無視し、軽視する最初からみ言葉を自分のうちに取り入れ、従うということなどさらさら考えていないのです。それこそアクセサリーかもう一つの服ぐらいの扱いです。従って当然心にそれが根付くことがない、そういう様子が描かれているのです。また「別の種は岩の上に落ちた。生長したが、水分がなかったので枯れてしまった。」とあります。それは 13 節によれば、「岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たち

のことです。」。この場合は、み言葉を聞いてそれを喜んで受け入れ、信じるのです。しかし、石に邪魔されて根を深く張ることができない、いわゆる「根が浅い」のです。根が深く張られていれば、地面の上がカラカラに乾燥してしまっても、地中深くにある水を吸収して生き続けることができます。しかし根が浅いと、地表の気候の変化に対応できずに枯れてしまう。信仰も、根が浅いと、試練に打ち勝つことができないのです。一時的にみことばに喜びを見出しても、自分の心の奥にある固い岩盤のような心の傷や歪んでしまった信念が邪魔になるのです。また「別の種は茨の真ん中に落ちた。すると、茨も一緒に生え出てふさいでしまった。」。それは 14 節によれば「茨の中に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らはみことばを聞いたのですが、時がたつにつれ、生活における思い煩いや、富や、快楽でふさがれて、実が熟すまでになりません。」。この場合には、根が浅いというのではなくて、むしろ周囲の状況から来る妨げによって、せっかく芽が出ても実を結ぶに至らず枯れてしまうということです。信仰においてはその妨げとは、「生活における思い煩いや、富や、快楽」です。思い煩いは、悩みや苦しみや悲しみ、つまり不幸です。富や快楽は喜びや充実感、満足を与えるもの、つまり一般的に幸福です。不幸であれ幸福であれ、悲しみであれ喜びであれ、神様のみ言葉の種が実を結んでいくための妨げになるというのです。人間は不幸、苦しみの中でも、また幸福、喜びの中でも、信仰を失い、神様から離れていってしまうことが起ることが言われているのです。幸せを求めて何が悪い。幸せを求めて私たちは生きているのではないか？そうです。幸せを求めることは何も悪いことではありません。しかし創造主なる神であり、救い主なる主イエスを無視した幸せというものは本当の幸せを私たちに与えてはくれないことを教えています。以上の三つが、み言葉の種が実を結ばないケースとして示されています。それに対して、「別の種は良い地に落ち、生長して百倍の実を結んだ。」というのです。それは 15 節によれば、「良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」。これが、み言葉の種が実を結ぶ場合です。

これが「種を蒔く人のたとえ」の内容です。私たちはこのたとえ話を読む時、当然ですが、自分はこの四種類のケースの内のどれだろうかと考えます。み言葉を聞いても、いつも右の耳から入って左の耳に抜けていってしまうような生活をしている、だから自分は道端のものだ、と思うかもしれません。また、一応み言葉を喜んで受け入れ、信じてはいる、だからこそこうして礼拝に集っているのだけれども、でも自分の信仰はいかにも根が浅い。ちょっと試練にあうとすぐにぐらついてしまう、身を引いてしまいそうになる、だから自分は石地のものだ、と思うかもしれません。あるいはまた、今自分は人生の思い煩いや富や快楽のまっただ中に置かれている、いろいろな苦しみや悲しみ、心配事がある、あるいは人生を充実させてくれる楽しいことがいろいろある、そういう中で、なかなか神様のこと、信仰のこと、教会のことに心が向いていかない、まさに自分の信仰は茨の中に塞がれてしまっている、と感じている人もいるでしょう。これらは、私たちがこのたとえ話を読む時に自然に抱く思いだろうと思うのです。

しかし、私たちはここで、最初に言っていたことに立ち返らなければなりません。このたとえ話は、そもそも、「あなたがた」つまり主イエスの弟子たちと、「他の人々」つまり群衆とははっきりと区別されているということです。この「種を蒔く人のたとえ」もそのために語られているのです。そしてここで際立たせられている違い、それは、み言葉の種が実を結ぶか結ばないかです。つまり最初の三つの土地と最後の「良い地」とが対比されているのです。そして「あなたがた」つまり主イエスの弟子たちのことを描いているのはどちらか。それは実を結ぶ「良い地」の方です。「他の人々」つまり群衆たちを描いているのが、最初の三つの、実を結ばない土地なのです。つまり主イエスがこのたとえ話によって語ろうとしておられるのは、弟子たち、信仰者たちの中には、道端や石地や茨の中のような人がおり、たまに「良い地」であるような人がいる、ということではないのです。主イエスはここで弟子たちに、つまり主イエスを信じて従って来ている信仰者たちに、あなたがたは「良い地」なのだ、道端や石地や茨の中のようにみ言葉の種が実を結ぶことのない「他の人々」とは違って、み言葉の種はあなたがたの中で百倍の実を結ぶの

だ、と語りかけておられるのです。

しかし私たちは、普通は、自分は最初の三つの土地のどれか、あるいはその全部だと感じます。自分が「良い地」だなどとはとうてい思えないのです。そしてそれは正しい感覚です。自分は良い地で、み言葉の種を百倍に実らせている、あるいは実らせてやろうなどと思っている人がいるとしたら、その人は自分自身のことが何も見えていない、よほどおめでたい人だと言うべきでしょう。私たちは、自分のことを少しでも冷静に、客観的に見つめるなら、自分が道端や石地や茨の中のような者であることを認めざるを得ないのです。しかしそのような私たちに、主イエスは、あなたがたは良い地だ、あなたがたにおいてみ言葉の種は百倍の実を結ぶのだ、と語りかけておられます。この主イエスの語りかけを聞き取るためには、大いなる発想の転換が求められます。つまり、自分がどのような人間であり、神様のみ言葉をどのように聞き、それをどのように実践し、それによってどのような成果をあげているか、ということに注目し、要するに自分が生み出している実りを見つめているならば、そこに見えてくるのは、道端や石地や茨の中である自分であって、それ以外ではあり得ません。しかしそれは見つめるべきものを間違えているのです。そもそも種が芽を出し、育っていき、やがて実を結ぶのは私たち人間の力によることでしょうか。

勿論人間はいっしょうけんめい畑を耕し、水や肥料をやり、雑草を抜き、などという作業をします。しかしそれは、種が育っていって実を結びやすい環境を整えているだけのことであって、人間の力によって実を造り出しているわけではありません。実を結ぶ力は種の中にあるのです。どんなに努力してもトマトの種からピーマンを収穫することはできません。どのような実りが得られるかは種によって既に決まっているのです。そしてその種を私たちは自分で造り出すことはできないのです。信仰もそれと同じです。信仰は、私たちの中にもともとその種があって、それを私たちが努力して育てていって実を結ばせるというものではありません。信仰の種は私たちが自分で造り出すものではなくて、外から蒔かれるのです。それを蒔いて下さるのは主イエス・キリストです。私たちがこのたとえ話を読む時に本当に見つめ、注目すべきなのは、種を蒔く人である主イエス・キリストなのです。そして主イエスが蒔いて下さっているみ言葉の種です。自分はどの土地かと自分のことばかりを見つめ、自分が生んでいる実りにばかり注目している私たちの目を、種を蒔いて下さっている主イエス・キリストと、主イエスが蒔いて下さっているみ言葉という種にこそ向けていく、そういう発想の転換、どこを見つめ、何に注目するかの転換が必要なのです。その時、道端や石地や茨の中のような私たち罪人に、それでもみ言葉の種を蒔き続けて下さっている主イエス・キリストのお姿が見えてくるのではないでしょうか。私たちは、み言葉を全く受け入れようとしなかったり、一旦受け入れても試練によってそれが枯れてしまったり、人生の思い煩いや富や快楽に塞がれてしまうことを繰り返しています。しかし主イエスを見つめ、蒔かれているみ言葉の種にこそ注目していくことによって、「神の国の奥義」が見えて来るのです。

良い地とは、「立派な善い心で御言葉を聞き、よく守り、忍耐して実を結ぶ人たち」であると語られています。しかしそれは、私たちが自分の力で立派な善い人間になるということではありません。「立派な善い心」というのは、み言葉をしっかり聞く心のことです。それをよく守るというのは、掟を守るとか、言いつけを守るという意味ではなくて、聞いたみ言葉を手放さずしっかりと持ち続けることです。忍耐してというのは、神の言葉である種が実を結ぶ時を忍耐して待つことです。「良い地」になるというのは、私たちが自分の力で良い実りを生むことができるようになることではなくて、み言葉の種に本来備わっている力を信じて、それが実を結ぶことを忍耐して待つ者となることなのです。私たちの歩みにはいろいろな試練が襲ってきます。人生の思い煩いに苦しむことも、富や快楽に心を奪われることもあります。そういった中で主イエスが私達に求めておられるのは、それらに打ち勝つ強い人間になることではありません。それらの全てをかかえている私達が、主イエスによって既に実現している神様の恵みのご支配、神の国の福音を信じ、主イエスが今も忍耐をもって蒔き続けて下さっているみ言葉の種をしっかりと持ち続け、それが実を結ぶ時を忍耐して待ち続けていくことをこそ主イエスは求めておられるのです。